

## 能楽雑感から その8

素謡の「情感」について

### ～ 素謡の「情感」について ～

春の会のあと、さる会友の方から、ご自身の謡が、感情移入過多ではなかったのではないか、そして、私がどう思っているか懸念している旨の質問がありました。

私からは、「それほど芝居がかっていたほどではないし、あれで宜しいのではないですか」とお答えしました。

素謡（舞についてもほぼ同様ですが）の「上手・下手」に関しての私の評価基準は、あくまでも正確に、即ち節も、音程も、間合いも正しく謡うことが何よりも大切であって、情感の表現も含めた所謂「謡いぶり」に関しては、二次的な評価であり、むしろ、人さまごまであって良いのではないかと思うのです。

謡いぶりは、人によって異なるのは当たり前のことです。

一方、謡を聴く側の評価ですが、ある人の謡を好ましく思い、別の人の謡を好きでないと判断することはよくあることであり、これを律する基準はありません。

但し、現実の問題として、プロの能楽師の謡いぶりを「個性」と言い、素人のそれを「癖」と言います。

我々アマチュアの謡愛好家にとっては、先ずは癖を感じさせないことが基本であり、それは言い換えれば、正しい、真面目な、几帳面な謡を心掛けることが大切であると信じます。

詞章を読み違えたり、中音を上音で謡い出すような力量なら、情感を出すか否かなどは考えない方が良かろうと思えますし、反面、基本がしっかりしているなら存分に、自分で判断した情感を表現なさったら、それで良いのではないのでしょうか。

### ～ 素謡の「情感」について (2) ～

謡の基本を一応マスターした後で、それは早くても入門から10年以降でしょうが、情感移入、言い換えれば自分の「謡いぶり」を磨いていく段階に入ります。

謡の情感表現には、声の高低と強弱、抑揚、テンポ、間の取り方など様々な要素が入り混じっていますが、これらの組み合わせを、曲趣乃至はその曲に対する自分なりの解釈、或いは、舞台折々の際の表現意欲に応じて、工夫し、繰り返し努力しなくてはなりません。

このことは、アマチュアの芸であれ、プロの芸術であれ、共通の要素であろうと思われれます。謡は芝居がかってはいけないと言われていています。つまり、常に、演技過剰になってはいけないことになっています。(仕舞も同断)

しかし、私はこれもご本人の選択に任せればよいことで、仮に、あくどい表現の限りを尽くしても、プロの場合はファンが減って実入りが少なくなる虞がありますが、アマチュアの場合は、恐れず、ためらわず、思い切って感情移入してみても良いのではないかと考えています。少なくとも、聞く人を楽しませたり、或いは、呆れさせたりする効果があるのですから・・・

通常、感情移入しやすいのは、四番目物と五番目物でしょう。特に、「葵上」とか、「班女」とか、「山姥」など、私が耳にしただけでも、シテ謡の表現の幅広さは驚く程です。

三番目物でも、「松風」のシテ謡は、謡い手によって変幻自在に変化します。シテ役だけではありません。「隅田川」のワキ、「鉢木」の後ワキなど、存分に芝居がかかることも可能です。

しかし、思うのですが、私にとって、本当に感情移入が難しいのは、感情移入し難い、淡々と謡うことを本旨とする曲です。「高砂」、「田村」、「東北」などなど枚挙に暇がありません。

淡々と謡いながら、聴く人に感動を与える謡を、謡ってみたいものだと思います。見果てぬ夢でしょうが・・・。

話は変わりますが、いつの間にかお家元が名前を変えられました。敢えて申し上げれば、何となく歌舞伎世界の名前のようにも思われますが、それによって、謡ぶりが芝居がかかることはあり得ないでしょう。